

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

文学への熱い思い

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新野, 緑, NIINO, Midori メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2390

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



文学への熱い思い

新野 緑

御輿哲也先生と最初にお目にかかったのは、私が神戸市外国語大学に着任した1987年の4月。当時学内公募制をとっていた外大へは中川時雄先生のご紹介もあって応募させていただきましたが、中川先生と事前に面識はなく、大阪大学の先輩である山田勝先生ともお目にかかる機会を得ないまま、未知の職場で大学教員としてのスタートを切ることになりました。着任したら個人研究室に籠らないで、時々学科の部屋に顔を出して同僚の先生とコミュニケーションをとるように、と人から教わってもいたので、早速共同研究室を覗いてみたのですが、いつ行ってもそこはガランとして、会議の時以外に人が集まる習慣がないのは明らかでした。

夜間の授業がある外大では、個々の教員の担当授業時間もバラバラでしたので、良い意味での個人主義、不干渉主義が自然と出来上がっていたのだと思います。束縛されない自由を有り難いと感じはしたものの、本当に分からないことや判断に迷うことがあれば誰に相談したらいいのか、と少々不安に思ったりもしました。その時、周囲をぐるりと見渡してほとんど直感的に思い定めたのが御輿先生で、もちろん、年齢が近かったことや、専門領域が同じイギリス小説だったこともありますが、それ以上に、信頼を誘う不思議な安心感が先生のまわりには漂っていました。

以来、およそ30年、その直感が裏切られたことは一度もありません。人見知りで最初はなかなか話しかけられずにいたのですが、大学の業務に始まり授業や自身の研究に至るまで、次第に様々な相談をさせていただくようになりました。用事というほどのことはなくとも先生の研究室に押しかけて、文学作品や最近出た研究書、さらに批評の方法や学会の動向などについて、ご迷惑も顧みずに長々と話し込むようになったのは、最初のご著書『自己の遠さーコンラッド・ジョイス・ウルフ』が刊行された頃のように記憶しています。モダニズム作家の多様な「自己表象」のあり方を、テキストに潜む生と死、主観と客観、言語と沈黙などの複雑なアンビヴァレンスに着目して解明する秀逸なご研究で

したが、その鋭い感性と精緻な読みに感嘆すると同時に、先生特有の技巧を凝らした文体が、本来異なる個性を持つはずの3人の作家を似通ったものに見せてしまっているのではないか、といった不満も厚かましく申し上げたのです。まだ若くて生意気盛りで、批判も含んでこそ真の批評と思いついてもいたので、今思うと恥ずかしいことですが、寛容にも先生はその姿勢をむしろ是として下さったように思います。

研究や批評に対する先生の姿勢は、私の最初の著書の出版記念会で、褒め言葉が続く中、「僕はいつまでたっても蟬捕り少年のままなので」と前置きされたうえで、新しい批評理論に依存してディケンズを論じる危うさをやんわりと批判されたことにも示されているように思います。もちろん、決して場の雰囲気や損なうような棘のある言い方ではありませんでしたが、どのような時でもご自身の批評的信念を貫こうとされる強い意志が感じられ、身の引き締まる思いをしたものです。じっさい、先生からは、折に触れて貴重なご助言やご批評をいただきました。着任後しばらくして、「新野さん、もう少し自分の文体を作った方がいいよ」と言われたのもその一つで、文体だけではなく、論者としての姿勢、あるいは厚みのようなものを形作る必要性を指摘されたのだと独り合点に理解して、以後の励みとしました。また、同僚の昇任に関わる答申書を書いた折に、部分的な読み間違いを密かに指摘して下さり、「新野さん自身の名誉の問題だから」とおっしゃたことも印象深い思い出です。

御輿先生のご講義は常に高い人気を誇り、必ずしも文学に興味を持っていなかった多くの外大生に、文学研究の面白さを実感させるものでした。名高いご講義を一度拝聴したいとお願いしても、「企業秘密」と断られ、やっと最終講義でその「秘密」の一端に触れることができたのは嬉しいことでした。10年ほど前に思いがけず体調を崩されるまでは、学内の重要な委員会の長を数多く兼任され、ご多忙の中、愚痴をこぼされることなく誠実に任に当たられて、多くの同僚の信頼と尊敬も宜なるかなと思ひ至ります。このような先輩が同僚として身近にいてくださったことは何よりの幸福で、外大での30年に亘る教員生活があらゆる面で充実したものとなったのは、ひとえに先生のおかげと感謝しています。ご定年にあたり、先生の文学に対する熱い思いを少しでも引き継いで、外大をより一層豊かな場所にするよう皆で力を合わせていければと祈りつつ、先生をお送りする言葉とさせていただきます。